

香川県における古代赤彩土器の考古学的研究

大塚 純 司

1. はじめに

赤彩土器とは器表面に赤色顔料（酸化第二鉄）を塗布した低火度・酸化焰焼成の素焼の土器を表す用語である。古代において赤彩土器が奈良時代に全国的に盛行することが広く知られているが、その実態は各地域によって様々である。近年の開発事業に伴う発掘調査によって、香川県においても古代の土器資料が蓄積されてきている。そこで、本地域の赤彩土器を集成し、その実態の把握および、その歴史的背景の理解を試みた。

本地域の赤彩土器の詳細な実態を把握するために、まず出土資料の集成を行った。そして、その分布・出土量・器種組成・色調・時期・径口分布・使用痕・製作技法などについて、考古学的方法論を用いて分析を行った。

本稿では県内における赤彩土器の詳細な分布状況を確認するために、赤彩土器の出土が報告されている遺跡だけでなく、既報告の古代の土器資料全般を対象に赤彩の有無を再確認し、原資料の中から赤彩土器を抽出するという方法をとった。そのため、赤彩の認定について報告書の記載とは異なる場合がある。また破片が小さく器表面が全体的に磨耗している場合など、土器の遺存状況が悪い場合、赤彩を施しているかどうかの判別は困難である場合が多い。そこで今回は、赤彩が施されているかどうか疑わしい資料は除外し、確実に赤彩を施していると判断できるもののみを分析の対象とした。なお全国的に古代の土器に対して塗彩される赤色顔料は全て酸化第二鉄、いわゆるベンガラであり、硯として転用された坏類に朱墨として水銀朱が付着する例は存在するものの、水銀朱あるいは鉛丹が土器の塗彩を目的として用いられることは例外的と言って良い。

ここで、基本的な用語について本稿での定義を明らかにしておく。低火度・酸化焰焼成の素焼の土器については、時代を限らず土器と呼ぶ立場から、本稿では土師器という用語は用いない。また古代という用語についても、様々な定義・用法が存在するが、本稿では飛鳥・奈良・平安時代を指すこととし、本稿で扱う資料は主に古代前半期のものである。

2. 県内の赤彩土器の様相

a. 分布

県内の赤彩土器出土遺跡は表採資料を含めて18遺跡である（図1・表1参照）。分布の東端である大川郡引田町馬宿畑方から、西端の善通寺市金蔵寺下所遺跡まで、その分布範囲は東西に広く、ほぼ県内全域に及ぶといってよい。さらに、櫃石島大浦浜遺跡のように島嶼部にまで分布している。

注目すべき点は、南海道の推定ルートに沿って赤彩土器出土遺跡が分布していることである。しかし、南海道ルートは現在も主要幹道となっている部分が多く、県内でも人口が集中する部分であり、開発工事が多いために調査密度そのものが高いたことが赤彩土器出土遺跡の集中した分布に反映されていることも考慮しておく必要がある。

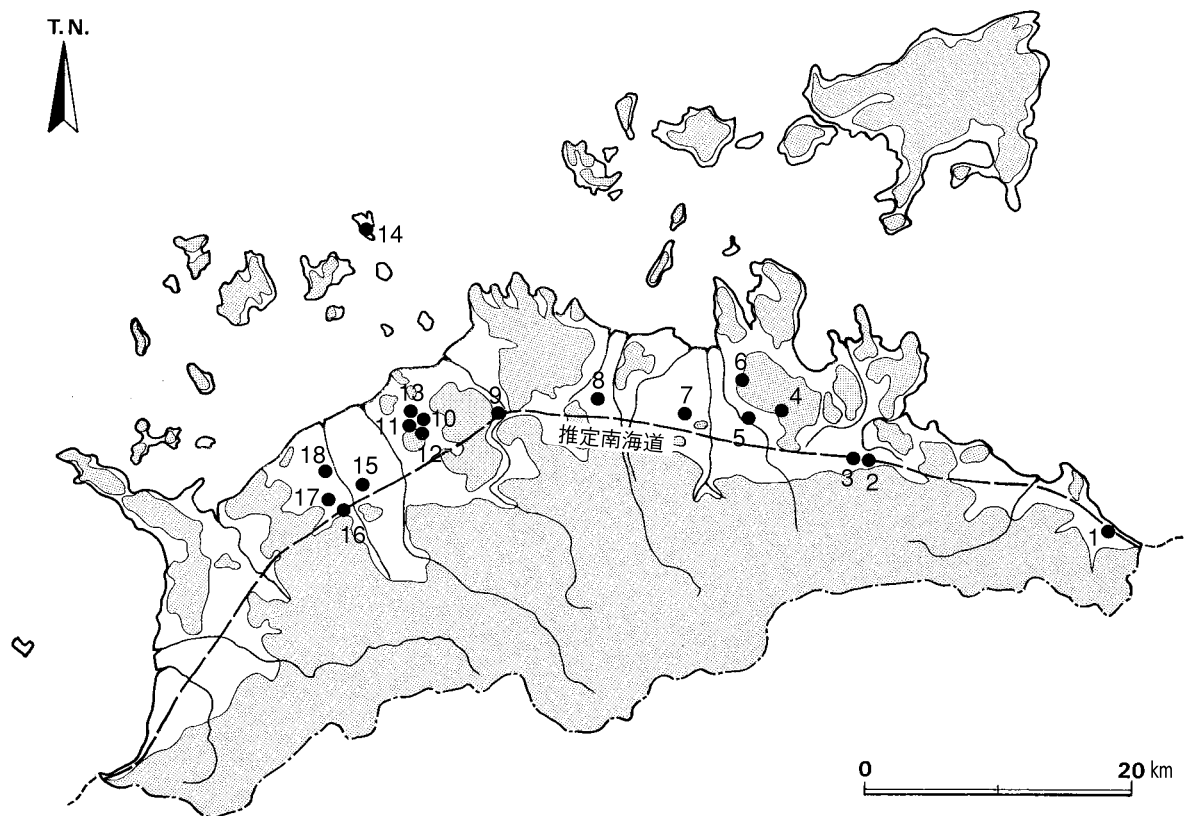
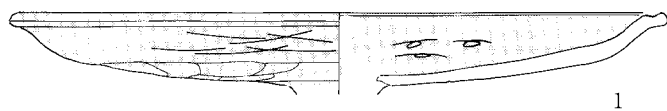


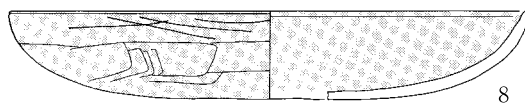
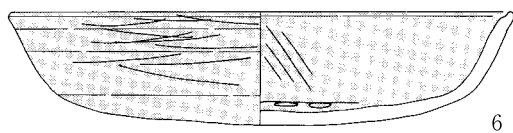
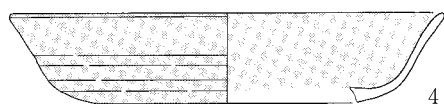
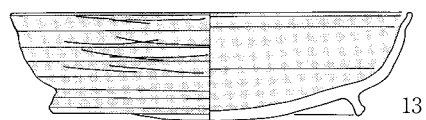
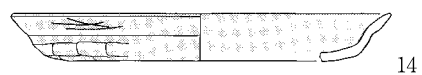
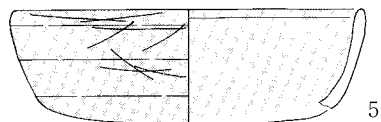
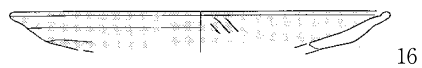
図1 香川県内赤彩土器出土遺跡分布

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	出土遺構	器 種	出土点数	口縁部個体数
1	馬宿畑方	大川郡引田町	採集資料	表面採集	高坏	1	0.45
2	森広遺跡	大川郡寒川町森広	集落	溝	坏・有台坏・鉢・皿・高坏	15	3.59
3	本村・横内遺跡	大川郡寒川町石田東	集落	不定形落ち込み・包含層	皿・蓋・高坏	3	0.26
4	塚谷古墳	木田郡三木町井上	古墳	横穴式石室	坏	1	1.00
5	前田東・中村遺跡	高松市前田東町	集落(官衙?)	溝・土坑・包含層・井戸	坏・有台坏・皿・有台皿 蓋・高坏・獣脚	35	3.93
6	小山・南谷遺跡	高松市新田町	集落	井戸・土坑・溝	坏・皿・蓋	3	0.34
7	空港跡地遺跡	高松市林町	集落	土坑	坏	1	0.23
8	正箱遺跡	高松市檀紙町正箱	集落	土坑	皿	1	0.00
9	讃岐国府	坂出市府中町	官衙	包含層	坏	1	0.07
10	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町一ノ又	集落	溝・不明遺構	坏・皿・有台坏	9	0.23
11	川津一ノ又遺跡Ⅲ区	坂出市川津町一ノ又	集落	土坑	蓋	1	0.13
12	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	坂出市川津町一ノ又	集落(官衙?)	掘立柱建物・ピット	坏・皿・有台皿・高坏	9	0.29
13	下川津遺跡	坂出市川津町下川津ほか	集落(官衙?)	竪穴住居・自然流路	坏・高坏	2	0.28
14	大浦浜遺跡	坂出市櫃石島大浦浜	製塩・漁業集落	包含層	坏	1	0.25
15	郡家原遺跡	丸亀市三条町黒島ほか	集落(官衙?)	掘立柱建物・土坑	坏・皿	4	1.02
16	生野本町遺跡	善通寺市生野本町	官衙?	溝	短頸壺	1	0.45
17	稲木遺跡	善通寺市稲木町・下吉田町	集落(官衙?)	包含層	皿	1	0.15
18	金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町	集落	自然流路	坏	2	0.19

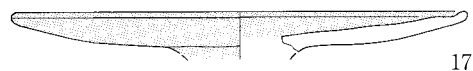
表1 香川県内赤彩土器出土遺跡



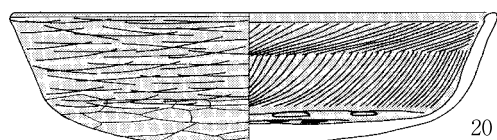
馬宿畑方表採



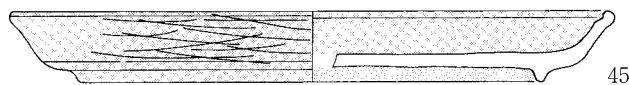
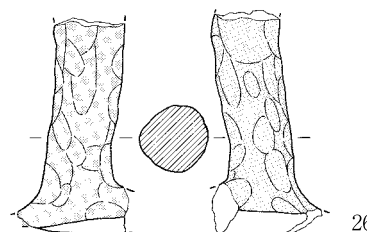
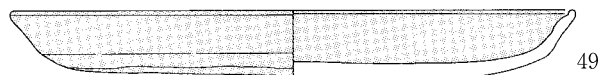
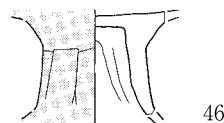
森広遺跡



本村・構内遺跡



塚谷遺跡

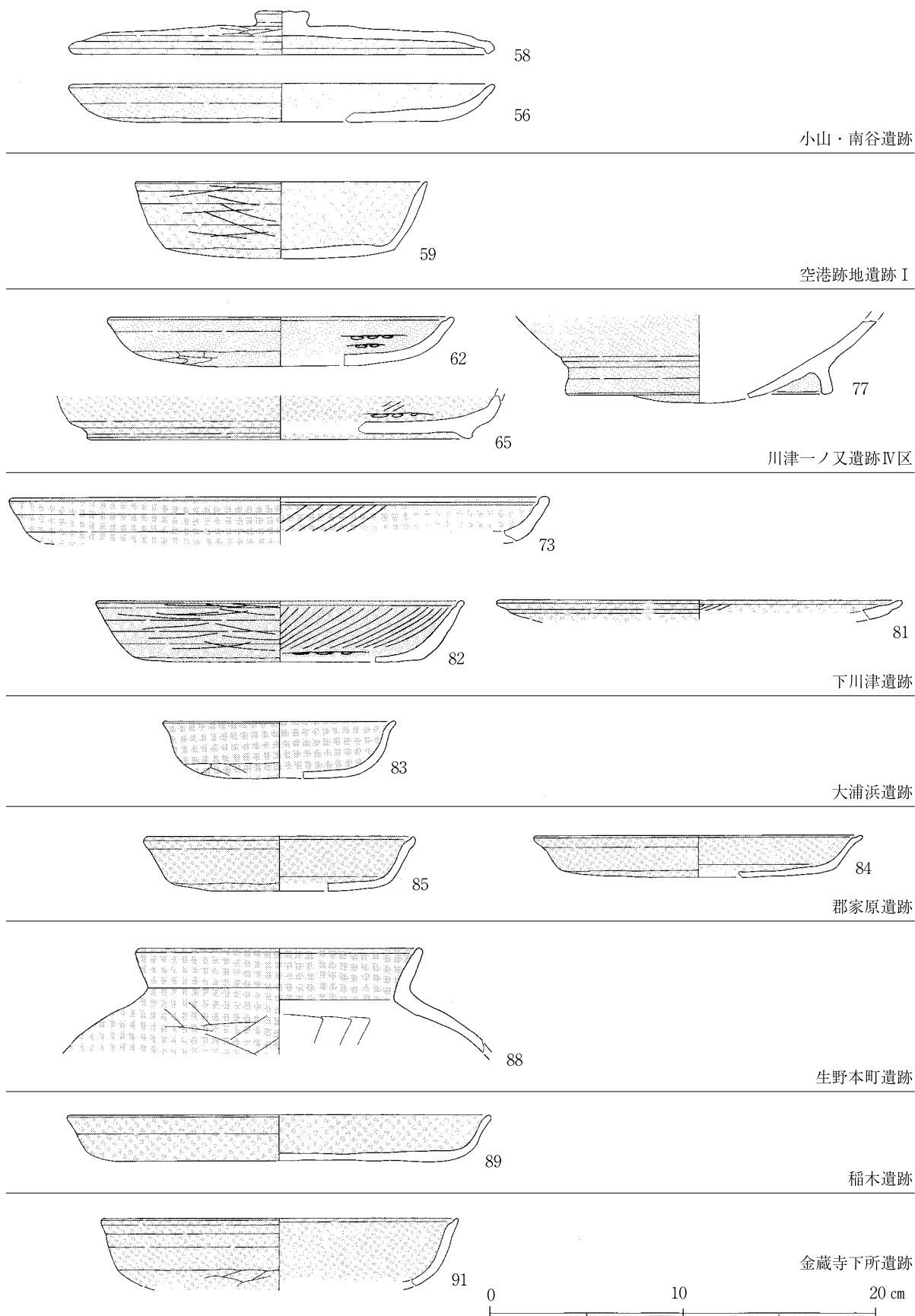


前田東・中村遺跡

0 10 20 cm

※遺物番号は表2に対応

図2 香川県内出土赤彩土器実測図



※遺物番号は表2に対応

図3 香川県内出土赤彩土器実測図

番号	遺跡名	報告書掲載頁	出土遺構	器種	口径	器高	口縁傾度数	赤彩部位	赤彩部色調	素地色調	ミガキ	内面暗文	使用痕
1	馬宿畑方		表面採集	高坏	26.0		0.15	内外面	2.5YR5/6	7.5YR7/4	外面	螺旋・放射	口縁・内面
2	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	20.0	3.5	0.06	内面（外面不明）	10R5/8	7.5YR7/4			
3	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	17.5	3.9	0.23	内外面	2.5YR5/8	7.5YR7/4	外面		口縁・内面
4	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	17.0	3.5	0.09	内外面	2.5YR5/6	7.5YR7/4			口縁・外面
5	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	鉢	14.0		0.22	内外面	10R5/8	7.5YR7/4	外面	螺旋・放射	口縁
6	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	20.0	4.6	0.83	内外面	10R5/8	7.5YR7/6	外面	螺旋・放射	口縁・内面
7	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	16.0	2.9	0.11	内外面	2.5YR5/6	7.5YR7/4	外面		口縁
8	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	皿	20.5	3.3	0.36	内外面	2.5YR5/8	5YR7/6	外面		口縁・内面
9	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	皿	19.0		0.17	内外面	2.5YR4/6	5YR6/6	外面		口縁・外面
10	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	18.5	3.2	0.21	内外面	2.5YR4/6	7.5YR8/4	内外面		口縁・外面
11	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	皿	19.0	2.8	0.50	内外面	2.5YR4/6	10YR8/2	内外面		口縁
12	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	皿	21.0	2.4	0.12	内外面	2.5YR5/6	5YR7/6		螺旋	
13	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	有台坏	16.0	4.2	0.35	内面・外面体部	2.5YR4/8	10YR7/4	外面		口縁・内面
14	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	15.0	1.9	0.11	内外面	2.5YR5/8	7.5YR7/4			口縁・外面
15	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	坏	14.5	3.6	0.15	内外面	2.5YR5/6	5YR6/6			口縁・内面
16	森広遺跡	報告書未刊行	S D 7801	高坏	15.0		0.08	内外面	5YR5/8	7.5YR7/4	外面	螺旋	口縁
17	本村・横内遺跡	p.129-No.134	S X 102	高坏	18.0		0.13	内外面	2.5YR4/8	10YR7/3			
18	本村・横内遺跡	p.133-No.155	包含層	皿	14.0	2.0	0.13	内外面	2.5YR4/8	10YR7/3			
19	本村・横内遺跡	p.136-No.198	包含層	蓋				外面（内面不明）	10R4/8	10YR8/3			口縁・内面
20	塚谷古墳	p.16-No.7	横穴式石室	坏	19.1	5.3	1.00	内外面	5YR5/6	10YR8/4	外面	螺旋・放射	口縁・内外底面
21	前田東・中村遺跡	p.148-No.464	C区 S D 09	坏	15.0	2.5	0.03	内外面	2.5YR6/6	2.5Y8/2			口縁
22	前田東・中村遺跡	p.148-No.465	C区 S D 09	坏				内外面	2.5YR5/6	10YR7/3			内底面
23	前田東・中村遺跡	p.148-No.466	C区 S D 09	皿	15.0	1.7	0.08	内外面	2.5YR5/6	10YR7/3			内面
24	前田東・中村遺跡	p.154-No.548	C区 S D 09	坏 ?				内外面	2.5YR5/6	10YR7/3			口縁・内面
25	前田東・中村遺跡	p.160-No.595	C区 S D 09	皿 ?				内外面	2.5YR5/6	10YR7/2			
26	前田東・中村遺跡	p.211-No.911	C1区包含層	歛脚				側面	2.5YR4/8	10YR8/3			
27	前田東・中村遺跡	p.211-No.912	C1区包含層	皿	18.0	2.5	0.10	内外面	2.5YR5/6	10YR8/4			
28	前田東・中村遺跡	p.219-No.1003	C5区包含層	高坏 ?	27.0		0.12	内外面	2.5YR4/8	7.5YR8/4		螺旋	口縁
29	前田東・中村遺跡	p.274-No.206	D区 S K 07	皿	20.0	1.3	0.06	内外面	2.5YR6/6	10YR8/2			口縁
30	前田東・中村遺跡	p.340-No.754	D2区包含層	蓋				内外面	2.5YR4/6	10YR8/2	外面		ツマミ外周・内面
31	前田東・中村遺跡	p.340-No.755	D2区包含層	蓋	17.5		0.09	内外面	2.5YR4/8	10YR7/3			端部・内面
32	前田東・中村遺跡	p.340-No.756	D2区包含層	蓋	22.0		0.14	内外面	2.5YR4/6	2.5Y8/2	内外面		端部
33	前田東・中村遺跡	p.340-No.758	D2区包含層	坏	15.5	3.9	0.50	内外面	2.5YR5/6	10YR8/3	外面		口縁・内面
34	前田東・中村遺跡	p.340-No.764	D2区包含層	坏	16.0	3.0	0.58	内外面	2.5YR4/6	10YR8/4			口縁
35	前田東・中村遺跡	p.340-No.766	D2区包含層	皿	25.0	1.9	0.10	内外面	2.5YR3/6	7.5YR8/4			内面
36	前田東・中村遺跡	p.340-No.767	D2区包含層	皿	29.0	1.4	0.08	内外面	2.5YR5/8	2.5Y8/2			
37	前田東・中村遺跡	p.340-No.768	D2区包含層	坏	17.0	4.0	0.05	内外面	2.5YR3/6	5YR6/6			内面
38	前田東・中村遺跡	p.340-No.769	D2区包含層	皿 ?	21.0		0.05	内外面	2.5YR3/6	5YR6/6			内面
39	前田東・中村遺跡	p.340-No.770	D2区包含層	蓋 ?				内外面	2.5YR3/6	5YR8/4	外面		内面
40	前田東・中村遺跡	p.341-No.772	D2区包含層	有台皿 ?				内外面	2.5YR4/6	10YR8/3		螺旋	内面・高台接地部
41	前田東・中村遺跡	p.341-No.773	D2区包含層	有台皿 ?				内外面	10R4/8	10YR8/2		螺旋	内面・高台接地部
42	前田東・中村遺跡	p.341-No.774	D2区包含層	有台坏 ?				内外面	2.5YR5/6	10YR8/3		螺旋	内面
43	前田東・中村遺跡	p.341-No.775	D2区包含層	有台皿				内外面	10R5/8	5YR6/6			
44	前田東・中村遺跡	p.341-No.776	D2区包含層	有台皿	25.5	2.7	0.03	内面（外面不明）	10R5/8	5YR6/6	外面	螺旋・放射	内面・高台接地部
45	前田東・中村遺跡	p.341-No.778	D2区包含層	有台皿	26.0	2.7	0.10	内面・外面体部	2.5YR4/8	7.5YR7/4	外面	螺旋・放射	内面・高台接地部
46	前田東・中村遺跡	p.341-No.781	D2区包含層	高坏				外面（内面不明）	2.5YR5/6	10YR8/3			内面
47	前田東・中村遺跡	II p.69-No.459	E区 S E 01	坏	17.3	2.9	0.40	内外面	2.5YR6/6	7.5YR8/2			口縁・外底面
48	前田東・中村遺跡	II p.69-No.461	E区 S E 01	皿	21.2	2.8	0.71	内外面	2.5YR5/6	10YR8/1		螺旋	口縁・内面
49	前田東・中村遺跡	II p.69-No.462	E区 S E 01	皿	22.2	2.8	0.60	内外面	2.5YR5/8	7.5YR8/3			口縁
50	前田東・中村遺跡	II p.69-No.463	E区 S E 01	皿	23.0	2.8	0.04	内外面	10R5/8	2.5YR8/4			口縁・外面
51	前田東・中村遺跡	II p.69-No.465	E区 S E 01	有台皿				内外面	2.5YR5/8	10YR8/2			内面・高台接地部
52	前田東・中村遺跡	II p.69-No.466	E区 S E 01	有台皿				内外面	10R5/8	2.5Y8/1			内面・高台接地部
53	前田東・中村遺跡	II p.69-No.467	E区 S E 01	有台皿				内外面	10R5/8	10YR8/3			内面・高台接地部
54	前田東・中村遺跡	II p.69-No.468	E区 S E 01	有台皿				内外面	2.5YR5/6	2.5Y7/3		螺旋	高台接地部
55	前田東・中村遺跡	II p.93-No.572	E区 S E 03	皿	18.0	2.3	0.07	内外面	2.5YR6/6	7.5YR8/2			口縁・外底面
56	小山・南谷遺跡	p.20-No.11	S E 701	皿	22.0	2.0	0.14	内外面	2.5YR5/6	7.5YR8/2			口縁
57	小山・南谷遺跡	p.27-No.66	S K 702	坏	14.5		0.12	内外面	2.5YR4/8	10YR8/3			口縁
58	小山・南谷遺跡	p.59-No.392	S D 729	蓋	22.0	2.8	0.08	内外面	2.5YR5/8	7.5YR8/3			ツマミ外周・端部
59	空港跡地遺跡	p.185-No.1200	S K c 44	坏	15.0	4.0	0.23	内外面	2.5YR5/8	5YR7/6	外面		口縁・内面
60	正箱遺跡	p.82-No.264	S K 06	皿				内外面	2.5YR4/8	10YR8/2			口縁・内面
61	讃岐国府	報告外	包含層	坏	16.5		0.07	内外面	2.5YR4/6	7.5YR8/3			
62	川津一ノ又遺跡	p.60-No.409	S D 11	皿	18.0	2.6	0.10	内外面	2.5YR5/8	10YR8/2		螺旋	内面
63	川津一ノ又遺跡	p.73-No.616	S D 11	皿				内外面	2.5YR5/8	10YR8/2			
64	川津一ノ又遺跡	p.73-No.618	S D 11	坏				内外面	2.5YR5/8	7.5YR7/4			
65	川津一ノ又遺跡	p.73-No.621	S D 11	有台坏 ?				内外面	2.5YR5/8	10YR7/3		螺旋・放射	内面・高台接地部
66	川津一ノ又遺跡	p.146-No.1595	S X 01	坏 ?				内外面	2.5YR5/6	10YR7/3			口縁・外底面
67	川津一ノ又遺跡	p.148-No.1653	S X 01	有台坏 ?				内外面	2.5YR4/8	7.5YR8/3			
68	川津一ノ又遺跡	p.149-No.1672	S X 01	坏	14.0		0.13	外面（内面不明）	2.5YR5/8	10YR8/3			内面
69	川津一ノ又遺跡	p.149-No.1682	S X 01	有台坏 ?				外面（内面不明）	2.5YR5/8	10YR7/3			
70	川津一ノ又遺跡	p.149-No.1685	S X 01	有台坏 ?				外面（内面不明）	2.5YR5/8	10YR8/3			
71	川津一ノ又遺跡Ⅲ区	p.199-No.1750	S K 07	蓋	15.0		0.13	内外面	10R4/8	7.5YR8/3	外面		口縁
72	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.126-No.665	S B 030	皿 ?				内外面	10R5/8	7.5YR7/4			口縁
73	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.140-No.693	S B 057	皿	28.0		0.09	内外面	10R4/8	5YR7/6		放射	口縁
74	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.142-No.700	S B 059	坏	15.0		0.09	内外面	10R4/8	7.5YR7/4		放射	口縁
75	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.144-No.708	S B 062	坏	13.5		0.06	内外面	10R4/8	5YR6/6		放射	口縁
76	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.144-No.709	S B 062	高坏 ?	16.0		0.05	内外面	10R4/8	7.5YR7/4			
77	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.149-No.732	S B 068	有台皿				内外面	10R4/8	7.5YR7/4			
78	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.158-No.758	S B 079	高坏 ?				内外面	10R4/8	7.5YR7/4			口縁
79	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.180-No.806	S B 127	坏				内外面	10R4/8	7.5YR7/4			
80	川津一ノ又遺跡Ⅳ区	p.191-No.860	S P その他	有台皿				内外面	10R4/8	7.5YR7/4			内面・高台接地部
81	下川津遺跡	p.145-No.118	S H Ⅲ09	高坏	21.0		0.06	内外面	10R4/8	10YR7/3		放射	
82	下川津遺跡	II p.109-No.1	第1低流路3	坏	19.0	3.2	0.22	内外面	2.5YR5/6	10YR7/2	外面	螺旋・放射	
83	大浦浜遺跡	p.238-No.17	包含層	坏	12.0	3.0	0.25	内外面	2.5YR5/6	2.5Y8/1			口縁
84	郡家原遺跡	p.109-No.463	S B 58	皿	17.0	2.3	0.20	内外面	10R6/4	10YR8/2			口縁・内面
85	郡家原遺跡	p.112-No.470	S K 89	坏	14.0	2.8	0.35	内外面	2.5YR5/6	2.5Y7/2			
86	郡家原遺跡	p.112-No.471	S K 89	坏	16.5	3.2	0.17	外面（内面不明）	2.5YR4/6	10YR7/2			
87	郡家原遺跡	p.112-No.477	S K 89	坏	17.0	4.2	0.30	外面（内面不明）	10R5/8	10YR8/2			
88	生野本町遺跡	p.13-No.50	S D 21	短頸壺	14.5		0.45	外面・内面口縁	10R4/8	10YR7/3			口縁・内面頸部
89	稲木遺跡B地区	p.140-No.314	包含層	皿	22.0	2.7	0.15	内面（外面不明）	2.5YR5/6	10YR8/2			
90	金蔵寺下所遺跡	p.40-No.45	S R 02	坏				内外面	2.5YR4/4	10YR8/2			
91	金蔵寺下所遺跡	p.40-No.46	S R 02	坏	18.5		0.19	内外面	2.5YR5/6	10YR8/2			口縁・内面

表2 香川県内出土赤彩土器一覧

また18遺跡中、7遺跡が官衙あるいはその可能性が推定されている集落である点にも注目すべき事項であると考え。

遺跡そのものの分布は県内一円に広がっていると言えるが、それらの遺跡からの出土点数についても考慮に入れる必要があると考え、個体識別法を用いて遺跡間の個体数の比較を行うとともに、宇野隆夫の提唱した口縁部計測法を用いて、各遺跡からの出土量を数値化して相対的に比較した（図4・5参照）。

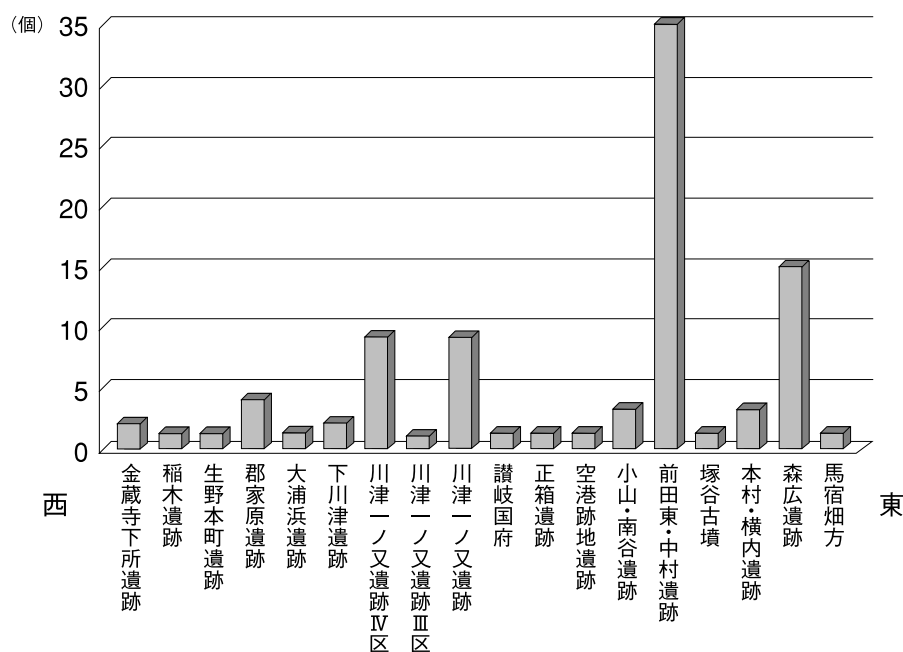


図4 個体識別法による赤彩土器出土点数

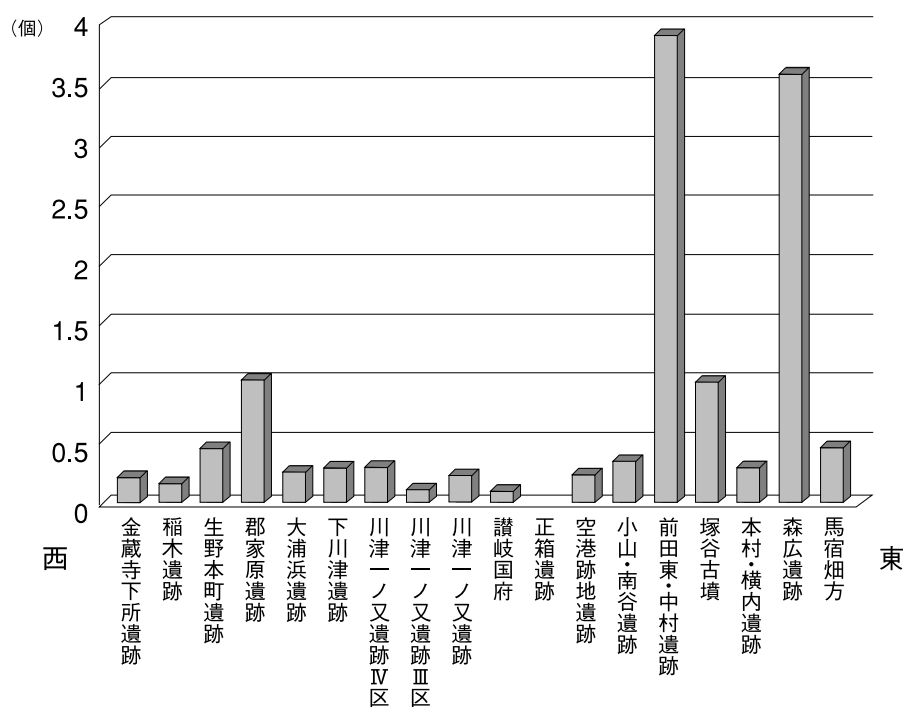


図5 口縁部計測法による各遺跡出土点数

両者の結果とも、出土量は大きく東部に偏っているという結果を得た。とくに、高松市東部の前田東・中村遺跡と大川郡の森広遺跡は個体数、出土量ともに突出している。県西部について見てみると、個体数としては坂出市の川津一ノ又遺跡からの出土数が多いが、口縁部計測法を用いて算出した出土量では丸亀市の郡家原遺跡、善通寺市の生野本町遺跡の方が上回っている。

古代行政機構の中心が置かれた県中央部ではほとんど分布が確認されていないが、このことは調査密度そのものの低さを反映している可能性も高いため、現時点での評価は控える。

b. 器種組成

本地域における器種組成について見てみる（図2・3・6参照）。県内において確認されている赤彩土器の器種は、坏、高台のついた坏（有台坏）、皿、高台のついた皿、坏・皿に対応する蓋、鉢、高坏、短頸壺、獸脚である。これらのうち、大部分を占めるのが、坏と皿であり、これらが最も普遍的な器種である。希少な器種としては、前田東・中村遺跡から獸脚が1点出土している。この獸脚の上部構造は不明であるが、盤など大型の供膳土器の脚部になる可能性が高いと考える。また生野本町遺跡出土の短頸壺は供膳具以外の赤彩土器としては県内唯一の例となる壺であるが、基本的に貯蔵具と考えられている壺も、赤彩を施していることから、例えば仏前に供える花器など、目に触れる供膳具として用いた可能性が想定できる。

なお前田東・中村遺跡で、赤彩が施された甕が数例報告されている。これらは小片であるか、または全体のごく一部分が赤く発色しているのみであり、県内には他の良好な資料も存在しないため、現時点では甕をはじめとする調理具に赤彩が施されているとは判断できない。

c. 色調

赤彩土器の色調を客観化したデータとして示すために、『標準土色帖』を用いて色調の判定を行った（表2・図7参照）。その結果、赤彩土器の赤彩部分の色相は大部分が2.5Y Rから10Rにかけての範囲に分布していた。これに対して、素地の色相は大部分が7.5Y Rから10Y Rにかけての範囲に分布しており、素地と赤彩部分との間では明らかな色相の差があることが判明した。さらに、明度については、素地部分が高いことがわかった。これはつまり、素地部分がより明るいということであり、赤色顔料の発色を際立たせるために白く明るい粘土素材を選択して用いたことが想定できる。

d. 時期

現時点では、資料的な制約も多く、本地域の酸化焰焼成の土器については古代の編年体系は確立していない。そこで、今回分析の対象とした土器の時期を考えるに当たっては、主に宮都の基準資料と対照し、年代を比定した。

最古の資料は塚谷古墳出土の坏である。県内の赤彩土器資料の中では、坏としては最も器高が高い。この器形的特徴や、外面の入念なミガキ、内面底部に施される螺旋状暗文、内面体部の2段の放射状暗文から、宮都編年の平城Ⅰ期に比定できる。実年代は7世紀末～8世紀初頭である。この年代は須恵器をはじめとする供伴する他の土器資料とも矛盾しない。この塚谷古墳出土例が最も古い形式的特徴を備えており、同時期に比定できる資料は現段階では存在しない。

下限については際立って新しい資料は見当たらない。県内の資料は、器表面が磨耗していて調整を確認できない場合を除いて、ほとんどの資料にミガキ・暗文が施されていること、および器形的な特徴から、大部分の資料がいずれも宮都編年の平城Ⅱ期からⅢ期にかけてのものと比定できる。

したがって、本地域における赤彩土器の存続時期は7世紀末から8世紀半ばまでと言える。

ただし、9世紀後半から10世紀前半にかけての時期に、とくに内面に黒色処理を施した土器の外面に赤い化粧土を施したように見えるものが、前田東・中村遺跡、森広遺跡などに存在する。これらの色調は10Rから2.5YRにかけての典型的な古代の赤彩土器の色調とは異なり、やや橙色気味であり、2.5YRから5YRにかけての色調を呈している。表面の状態も、赤彩土器のように表面に薄く塗膜がある状態ではなく、器表面から内部にかけて漸移的に色調が変化している様子が観察できる。8世紀前半の赤色顔料を塗布したものとは異質であるが、赤彩土器と同じく赤い発色を意図したものである可能性があり、その方法としては、鉄分を多量に含む泥状の化粧土を最終的な器表面の調整を行う際に塗りつけたものである可能性を指摘しておく。このような化粧土を使用したと考えられるものも、赤彩土器と同様に8世紀初頭以降、県内に存在する。

e. 径口分布

現在、本地域においては、古代、とくに奈良時代の無台の坏と皿の区別に関して、若干の呼称の混乱が見られる。そこで、今回分析の対象とした赤彩土器のうち、坏・皿類について径口分布を示し、径口指数によって、坏および皿を分別する一定の基準を求めることを試みた（図8・9参照）。なお、径口指数は仮に同一の器種であっても時間とともに変化するものであるが、今回分析の対象とした赤彩土器はその存続期間がおよそ半世紀ほどであることから、この間の時間幅は考慮せずともとくに問題ないと判断した。

図8の径口分布を見ると、その分布は図9のように2つのグループに分けることができる。そこでこれらの間を通る直線で2者を分離した。その直線は口径が20cmの時に器高がおよそ3cmという値を通る。つまり、器高÷口径が、0.15以上なら坏、0.15以下なら皿と判断してよいであろう。この値は同時期の宮都資料の場合とはほぼ同様であることから、赤彩土器に限らず同時期の土器全般に対して適用することが可能であると考ええる。

f. 使用痕

一般的に煮炊具に比して供膳具の使用痕を確認することは難しい。それは煮炊具の使用痕が、煤

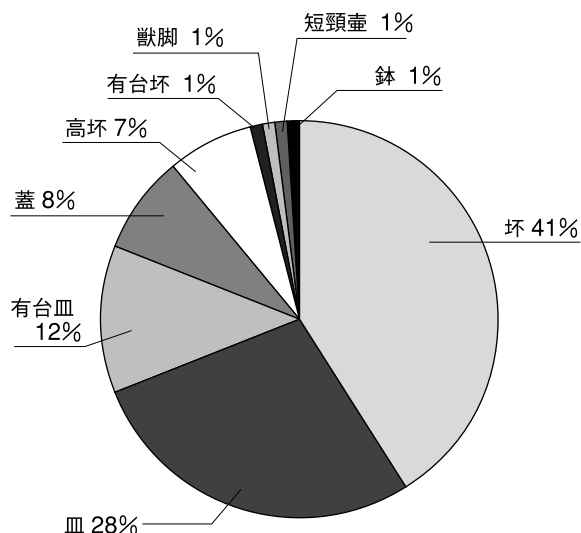


図6 香川県における赤彩土器の器種組成比

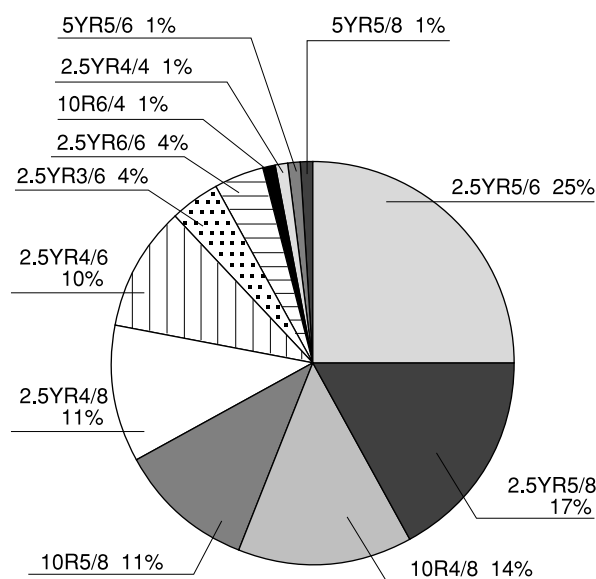


図7 赤彩土器の色調

や赤変といった可視的な現象として残ることに対し、火にかけられることのない供膳具は多くの場合、器表面の磨耗という視覚的に看取しにくい情報としてしか使用痕が残らないからである。しかし、赤彩土器の場合は、器表面を薄く赤色顔料が被っているため、使用による磨耗があった場合、赤色顔料が剥離し、使用痕の観察が比較的容易である。

器表面の磨耗・剥離を対象とした使用痕観察を行うにあたって注意しなければならないことは、現在観察される磨耗や剥離が、使用によるものであるか、それとも廃棄後に生じたものであるかを識別することである。出土土器に見られる磨耗や剥離が、廃棄後の自然条件によって生じたものならば、器表面全体にわたってそれが認められるはずであり、そのような個体は観察の対象から除外した。また、同一の遺構から出土した一括資料については、自然条件は概ね一様であると考えられ、その中で磨耗・剥離の程度を相対的に評価することによって使用痕の判別は可能であるとする。

そこで、県内の赤彩土器資料を対象に使用痕の観察を行った。その結果、使用痕は外面よりも内面に認められる場合が多く、これは、食物をいれて食事することに加えて、食事を終えてから土器を洗浄することによる器表面の磨耗が大きいものと推察した。また口縁部に使用痕が認められる場合が多いことは、食事の際に直接口をつける場合や、箸や匙などが当たった可能性のほかに、土器を手を持つ時につかんだために生じたためと考えられる。また外底面や高台接地部分に使用痕が認められるものも多かった。これは、土器を置いたり、手に持ったりする際に台との摩擦や手擦れによって生じたものと考えられる。

今回観察対象とした赤彩土器の多くに使用痕跡が認められたことと、一般集落からも、他の赤彩が施されない土器と同様に出土している事実をあわせて考えた場合、赤彩土器は特別な目的のみに使用されたわけではなく、日常的な食器として使用されたものである可能性が高いと考える。しかし、これは赤彩土器が祭儀など特別な目的にも使用されたという可能性を否定するものではない。

3. 赤彩土器の焼成実験

赤彩土器の製作工程を復元することを目的として焼成実験を行った。窯はガス窯で行い、赤色顔料は市販されている陶芸用のベンガラを用い、粘土素材は信楽土を用いた。焼成温度は最高約800度で焼成時間は約8時間である。

縦4cm、横10cm、厚さ5mmほどの粘土板をテストピースとして作成し、乾燥させた後、焼成前に顔料を塗布した。その際に顔料を塗布する回数、ミガキと塗布の順序を変えて、それぞれの結果について検討した（写真図版1参照）。なお、ミガキおよび暗文を施す際には先端を丸く磨いたステンレス製の金属の棒を使用し、顔料の塗布には絵筆を使用した。

写真1は粘土板の乾燥がある程度進んだ後に顔料を1回のみ塗布し、その後にミガキおよび暗文を施したものであり、写真2は同じもののミガキ部分を拡大したものである。ミガキを施す際に、とくに問題はなくスムーズに行えた。ただし、乾燥が進みすぎたか、施文具が不適切であったためか、暗文を施す際に表面の赤色顔料を剥ぎ取り、素地が露出してしまう結果となった。ミガキ部分の表面は平滑で光沢を有する。

写真3は写真1の場合と同条件で顔料を3回重ね塗りの後にミガキ・暗文を施したものであり、写真4は同じもののミガキ部分を拡大したものである。顔料の層が厚いために、施文具が粘土に達せず、ミガキ・暗文を施す際に表面の顔料の層を削り込むような感触があり、非常に作業が行いに

くいという印象をもった。ミガキ部分・暗文部分共に、施文具が十分に粘土に達していないため、器表面は光沢を有さず、顔料層の凹凸が目立つ仕上がりであった。

写真5は、粘土板がある程度乾燥した段階で先にミガキ・暗文を施し、あとから顔料を塗布したものである。顔料がない段階で施文するため、ミガキ・暗文の施文作業はやりやすいが、仕上がりを見ると、顔料によってミガキ・暗文部分が全く見えないという結果であった。

この他に、塗布の回数を1回から10回程度まで段階的に行った場合についても実験を行ったが、

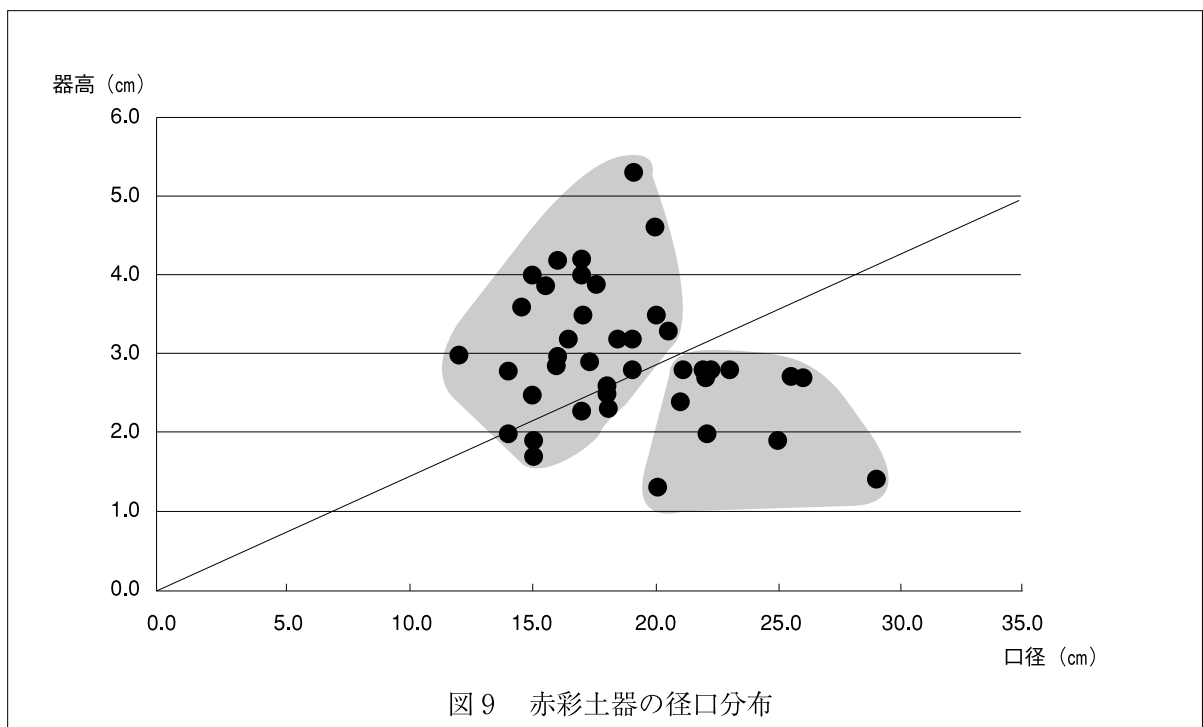
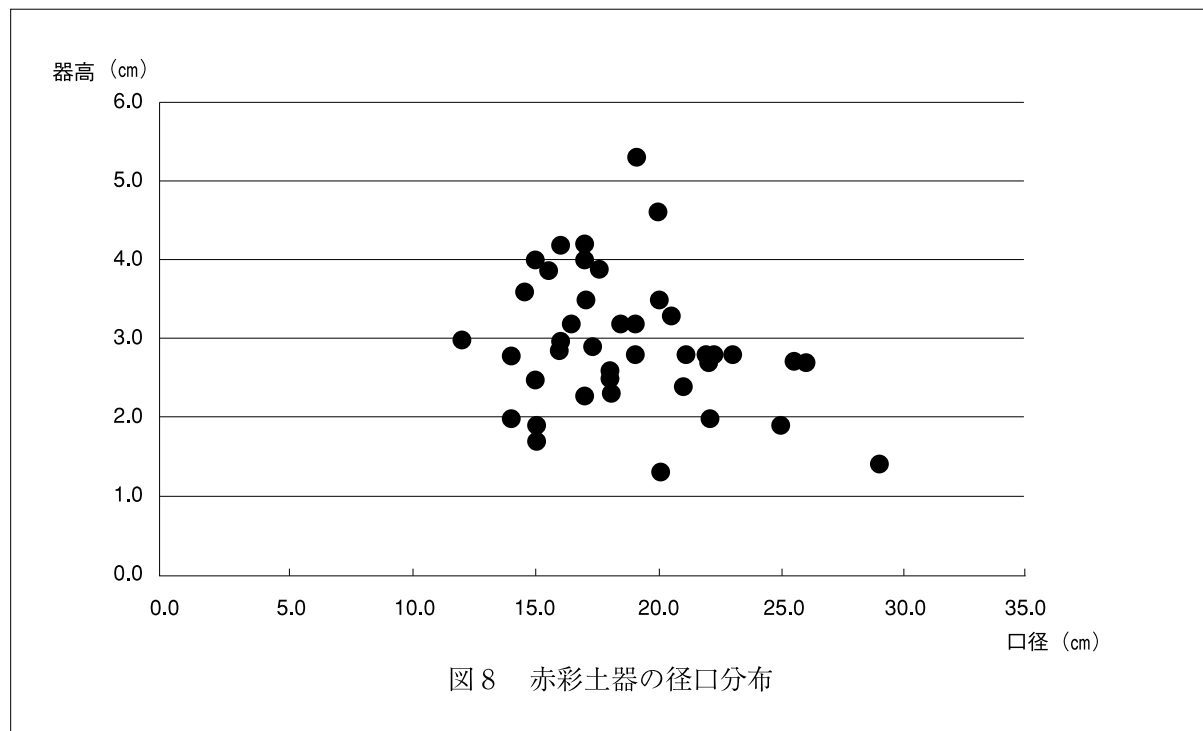




写真1 顔料1回塗布後ミガキ・暗文施文



写真2 顔料1回塗布後ミガキ（部分拡大）



写真3 顔料重ね塗り後ミガキ・暗文施文



写真4 顔料重ね塗り後ミガキ（部分拡大）



写真5 ミガキ・暗文施文後顔料塗布



写真6 森広遺跡 SD7801出土有台坏外面底部

写真図版1 焼成実験結果

顔料を一回のみ塗布した場合も、10回塗布した場合も、外見的には全く見分けがつかない程度の差しかないという結果を得た。これはベンガラ顔料が不透過性を持つためであると考ええる。

以上の実験結果から、最も妥当性が高いと判断する赤彩土器の作業工程は、形を作り粘土をある程度乾燥させた後、乾ききってしまう前に顔料を塗布し、暗文・ミガキを施すという順序である。その際、顔料の塗布は最小限の回数で、もっとも高い効果をあげることができる。重ね塗りしても、ミガキや施文作業が施しにくくなるだけであり、視覚的にも1回の場合と差がないため、重ね塗りは顔料を多く使う分、無駄にコストを費やすのみであり、実際に行なわれていたことは想定し難い。

写真6は森広遺跡出土有台坏（遺物番号13）の底部外面である。「Z」字状に赤色顔料が塗彩されており、実際に顔料の塗布に筆状のものが用いられていたことを示す貴重な例である。このような塗彩が施された理由としては、窺記号と同様の意味をもつものか、あるいは顔料の具合を見るための試し書きであるとも推測できる。顔料を塗布する方法としては筆や刷毛の他に、土器を顔料が大量に入った容器に漬ける方法も想定可能であるが、顔料の層は薄いほど良いという実験結果と、この遺物の例をあわせて考えると、顔料塗布には筆あるいは刷毛を用いることが一般的であったと推定する。

4. おわりに

香川県における赤彩土器は7世紀末～8世紀初頭に出現し、8世紀前半に盛行した後、急速に衰退する。この出現時期および盛行の時期は全国的な赤彩土器の動向と一致している。このことから、香川県における赤彩土器の出現と盛行も汎日本的な土器様式の変化に沿ったものであり、地域独自の事情によるものとは考え難い。赤彩土器の出現および盛行は、律令国家による地方支配の施策の一部であったと推察する。赤彩土器の出現および盛行の時期は全国的に一致するが、衰退の時期に関しては各地方によって様々である。本地域では8世紀半ば頃には消滅するという結論を得たが、これは全国的な視野で見れば、関東地方と同様に比較的早い事例である。赤彩土器の消滅は次の新たな土器様式の萌芽であり、この消滅の早さは讃岐という地域の古代社会における先進性を表していると考ええる。

謝辞

本稿の作成にあたって下記の方々・機関から数多くの御教示およびご協力をいただくとともに、資料の実見に際して便宜を図っていただいた。ここに記して感謝の意を表す。

宇野隆夫、柏徹哉、片桐孝浩、木下晴一、蔵本晋司、佐藤竜馬、高松市教育委員会、土橋尚起、信里芳紀、乗松真也、引田町歴史資料館、藤木海、松田朝由、松本和彦、真鍋昌宏、森格也、山下登志子、渡邊淳子（敬称略、五十音順）。

赤彩土器出土遺跡文献リスト

馬宿畑方 引田町歴史民族資料館収蔵資料

森広遺跡 片桐孝浩 1995「讃岐出土の東北系土器について ―特に黒色土器について―」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅲ』香川県埋蔵文化財調査センター

本村横内遺跡 山元素子 2000『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 八丁地遺跡 本

- 村・横内遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター
- 塚谷古墳 西岡達哉・谷畑雅稔・喜岡永光・信里芳紀 1997『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小谷窯跡 塚谷古墳』香川県埋蔵文化財調査センター
- 前田東・中村遺跡 森格也・古野徳久 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』香川県教育委員会ほか
- 小山・南谷遺跡 片桐孝浩 1997『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター
- 空港跡地遺跡 西岡達哉 1996『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか
- 正箱遺跡 廣瀬常雄・西村尋文・北山健一郎 1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う発掘調査報告 正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター
- 川津一ノ又遺跡 片桐孝浩 1997『中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 川津一ノ又遺跡Ⅲ区 山下平重 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか
- 川津一ノ又遺跡Ⅳ区 古野徳久 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ』香川県教育委員会
- 下川津遺跡 藤好史郎・大久保徹也・西村尋文 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会ほか
- 大浦浜遺跡 大山真充・真鍋昌宏 1988『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 大浦浜遺跡』香川県教育委員会ほか
- 郡家原遺跡 山下平重・真鍋昌宏・岡敦憲 1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第13冊 郡家原遺跡』香川県教育委員会ほか
- 生野本町遺跡 國木健司 1993『生野本町遺跡発掘調査報告書』香川県教育委員会
- 稲木遺跡 渡部明夫・真鍋昌宏・野中寛文・西岡達哉 1989『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡』香川県教育委員会ほか
- 金蔵寺下所遺跡 廣瀬常雄 1994『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊 金蔵寺下所遺跡西碑殿遺跡』香川県教育委員会ほか

香川県における古代赤彩土器の考古学的研究

大塚純司

本稿は、土器の分析から古代社会の実態の一端を明らかにすることを目的として、赤彩土器をとりあげ、これについて分析・考察したものである。赤彩土器とは器表面に赤色顔料（酸化第Ⅱ鉄）を塗布した低火度・酸化焰焼成の素焼きの土器である。この赤彩土器について、香川県内の出土例を集成し、様々な視点からこれを分析するとともに、製作技法を明らかにするために焼成実験を行い、その結果についても示した。

本県における赤彩土器は、県内全域の広い範囲に分布する。出現時期は7世紀末から8世紀初頭であり、8世紀前半に盛行し、8世紀中に消滅する。これは汎日本的な赤彩土器の趨勢と一致することから、本県における赤彩土器の動向は地域的な事情によるものではなく、全国的な土器様式の変化に沿ったものであり、ひいては日本社会全体の在り方の変化を反映したものであると考えた。

Archaeological Research of Ancient Red Painted Ware in Kagawa Prefecture

By Junji Ootsuka

In this paper, aiming to make clear a part of the realities of an ancient society based on the analysis of pottery, we take up the red painted ware, and analyze and consider them. The red painted ware are biscuit ones of the low fire degree and the oxidizing atmosphere in firing, on the surface of which are spread red pigments (ferric oxide). As for the red painted ware, we collect them excavated in Kagawa Prefecture, analyze them from various points of view, do the firing experiments to clarify the production technique and show the results of those experiments.

The red painted ware distributed over a wide range of the whole area in Kagawa Prefecture. This appeared from the end of the 7th century to the beginning of the 8th century, and was produced flourishingly in the first half of the 8th century, but disappeared during the 8th century. Because this change was corresponding to the tendency to the pan-Japanese red painted ware, we think that the change of the red painted ware in this prefecture did not depend on regional circumstances, but went along the nationwide change of ware styles and reflected the whole change of the way of the Japanese society in its turn.

카가와(香川)현에 있어서의 고대 赤彩토기의 고고학적 연구
오오쓰까(大塚) 준지(純司)

본 논고는, 토기의 분석에서 고대사회 실태의 일단을 밝힐 것을 목적으로 하며, 赤彩토기를 채택하여, 이에 대한 분석·고찰을 한 것이다. 赤彩토기란 그릇 표면의 적색안료(산화제2철)를 도포한 低火度·酸化焰燒成한 질그릇이다. 이 赤彩토기에 대해서, 카가와(香川)현내의 출토사례를 집대성하여, 여러 시점에서 이들을 분석함과 동시에, 제작기법을 밝히기 위해서 소성실험을 하여, 그 결과도 제시하였다.

카가와(香川)현에 있어서의 赤彩토기는, 현내全域에 광범위하게 분포한다. 출현 시기는 7세기말에서 8세기초두이며, 8세기전반에 성행하여, 8세기 중에는 소멸한다. 이것은 汎일본적인 赤彩토기의 趨勢와 일치함으로, 카가와(香川)현에 있어서의 赤彩토기의 동향은 지역적인 여건에 의한 것이 아닌, 전국적인 토기양식의 변화에 따른 것이며, 아울러 일본사회 전체의 흐름을 반영시킨 것이라고 생각한다.

香川縣古代紅彩土器的考古學性研究
大塚純司

本論文目的如下；透過土器的分析、明確古代社會的實際情況。作者爲了達成這個目的、提出紅彩土器爲例、進行了其分析以及考察。紅彩土器是在土器表面塗抹上紅色顏料〈氧化第Ⅱ鐵〉後、在低火度・氧化火焰的條件下燒成的土瓷。關於這紅彩土器、作者集香川縣出土例之大成、從各種觀點進行分析、同時進行燒成實驗出示了實驗結果。這實驗的目的是明確土器的製作技術。

紅彩土器分佈於香川縣內全域的廣大範圍。它的出現時期是從 7 世紀末期至 8 世紀初頭、盛行於 8 世紀前半期、在 8 世紀內消滅。這動向符合全日本性的紅彩土器的趨勢、因此作者推測本縣的紅彩土器的動向不是地域性緣故、而是隨著全國性的土器樣式形成變化、作者又認爲本縣的紅彩土器趨勢變遷進而反映著日本社會的情況。